

後の10年間で、旧制中の流

# いまを読み解く

## 解説のページ

たともいえる。(中庄貴彦)

氏名 佐々木 義文 (27歳)

秋田市の河辺雄和商工

会が、芸術を核に移住者や観光客の呼び込みを目指す取り組みを始めた。名付けて「芸術の里かわべゆうわ」構想プロジェクト。人口減に伴い増加している空き家・空き店舗を住居やアトリエとして芸術家に活用してもらい、地域活性化につなげる考えだ。佐々木義文事務局長に、プロジェクトの狙いや今後の進め方を聞いた。

「ここが」  
聞きたい

全会員を対象にしたアンケートでは、全体の6割が「後継者がいない」と答えている。これは危機的な数字。企業の後継者がいないということは地域の後継者がいなくなるということでもある。人口減が進む中、全く新しい視点での対策が必要だと考えた。

### 地域活性化

佐々木 義文さん(63) = 河辺雄和商工会事務局長



ささき・よしふみ  
50年5月10日、秋田市河辺生まれ。近畿大卒。県商工会連合会で事務局長や企画部長などを務めた。定年後に再雇用され、11年から現職。秋田市東通住。

プロジェクトを始めたきっかけは。  
佐々木 河辺雄和地区は2005年の市町合併で秋田市になったが、地区の人口は1割減った。人口減は地域経済に直結するだけに、商工会としても大きな課題。商工会の

「芸術を核にした理由は。佐々木 河辺雄和商工会を含め、どこの商工会でも交流人口を増やそうと観光振興や物産振興に取り組んできた。だが、この二つではなかなかうまくいかず、このままでは

いけないと考えていた。ここ数年、河辺雄和に魅力を感じた地域外の芸術家が相次いで移住してきており、この動きを広げたいと思った。  
「芸術家が思う河辺雄和の魅力とは何か。佐々木 陶芸家は静かな自然環境に魅力を感じ、和紙創作家は豊富な地下水に引かれたという。住み慣れた人間には見えにくい点がアピールポイントになると気付かされた。河辺雄和には空き家・空

き店舗がたくさんある。放っておけば「負の遺産」だが、「地域の財産」にもなり得る。芸術家に住居やアトリエ用として紹介していきたい。  
「具体的にはどのようにプロジェクトを進めるのか。佐々木 商工会の方だけでは限界がある。まずは移住してきた芸術家たちのネットワークを構築し、そのネットワークを生かし新たな芸術家を呼び込みたい。行政の協力を得て、空き家の改修費補助といった支援策も用意したい。

反応だったそうだが。佐々木 「誰でもいいから移住してください」と呼び掛けても難しいのを、芸術家に絞って進めるのはさらに難しいと分かっている。移住にこだわらず、アトリエとして使ってもらってもいい。  
「最終目標は。佐々木 芸術家に会いたい、作品を見たい、買いたいという観光客はすぐに帰るわけではなく、地域を回って食事したり、買い物したりしてくれるはず。商工会会員のビジネスチャンスを広げ、地域活性化に結び付けたい。

# 空き家に芸術家誘致

7月に東京に出向いて関係者を訪問した際は厳しい

(聞き手 内田隆之)